

# 豆狸の寝言

副会長 三原幸二

うとうととしかかった時、いきなりドスンと大きな音がして、その音と振動で目が覚めた。

十二月の初旬、名古屋で会合があり、新幹線から地下鉄に乗り換え二つ目の駅にさしかかった時のことである。となりの座席を見ると一歳半か二歳ぐらいの子供が、右手にストローをさした牛乳パックを持ち、左手にはしっかりとパンケーキを持っている。母親らしい人が靴を脱がせていたが、その子は靴下も脱がせとせがんでいた。

私は、その日の会合のために一張羅の背広を着ていたもので、子供の牛乳がこぼれて汚されはしないかと少々気になったが、その子の母親は上品そうな、感じのよい人で、子供の足が私に軽く当たっただけで、「すみません」と、いかにも申し訳なさそうに謝った。

私は「いえ、いえ、気になさらないで下さい」と応じた。

そのやり取りを見ていた子供が、母親に「だれ、だれ？」と、聞いた。母親が黙っていると、

「だれ、だれ？」と何度も聞いている。母親は、どう言ったものか迷っている風だった。

「だれ、だれ？」と子供はしつこく聞いていたが、しまいには「だれ、パパ？ パパなの？」と聞く始末。母親はどう答えたものか困っている様子だったが、やがて小さな声で、

「ウ・ル・ト・ラ・マ・ン」

と答えた。



すると子供の顔つきがガラリと変わり、隣から私の顔をじっと見上げている。私は、この子供の期待を裏切らないようにするには一体どんな顔をすればいいんだろう。年老いたウルトラマンは悩みに悩んだ。

時間にすれば数分のことだったが、その親子が電車を降りるまでの長かったこと。

いま思うと、あのとき私は「ウルトラマン」ではなく、「パパ」になりたかった。そう、お母さんはとても美人でした。

(2007年・「ウルトラマン」)